

“香り”で読む安房直子のファンタジー

Understanding the fantasy stories of Awa Naoko through the notion of “flavor”

大沼郁子*
Ikuko ONUMA TASHO

‘香り、’で読む安房直子のファンタジー

Understanding the fantasy stories of Awa Naoko through the notion of “flavor”

大沼郁子*

Ikuko ONUMA TASHO

Abstract In this paper, I consider the sense of smell by focusing on the expressions of “flavor” which exist in Awa Naoko’s (1943~1993) fantasy stories, and how this sense plays a functional role in her works. In her works, Awa Naoko describes the wonders of this world to the next world. I seek to understand features of her works from the point of view of the “five senses”. For example, I focus on the portrayal of colors, tones and foods in her works to understand how eyesight, hearing and taste serve as important factors in her stories. I believe that flavor is not only a sense of smell but also has additional functions in Awa’s works. I feel it is possible to arrive at a fuller understanding of the world of Awa’s works by giving attention to the notion of “flavor”.

Key words: Awa Naoko 安房直子, flavor 香り, smell におい, sense of smell 嗅覚

はじめに

安房直子（1934-1993）の作品の多くには、此岸から彼岸への移ろいが描かれる。時にはそこに、ゾクとする怖さや妖しさが含まれることもある。その独特の移ろいが、安房作品の魅力の一つと言えるだろう。これまで、そうした作品の特徴を安房直子の「五感」がどのように生かされているか、という視点から捉えようとしてきた。たとえば、視覚・聴覚・味覚がどのように生かされて物語が形づくられているかを見るために、作品中の色彩や音、食べ物の描写に注目し、それらが果たす役割を考察した^{1) 2) 3)}。

本稿では、作品中の‘香り、’の表現に注目し、そこに嗅覚で捉えられる以上の働きを見出すことで、安房直子の独特な世界を考察していきたい。

1. 文学作品に見る‘香り、’

児童文学の枠にとらわれず、‘香り、’が印象的に描かれている既存の文学作品を振り返ってみると、‘香り、’が記憶に結びついているものが多い。

‘香り、’と記憶が大きな役割をもつ作品というと、マルセル・ブルースト（1871-1922）の長編作品『失われた時を求めて』（1913-1927）が真っ先に思い浮かぶ。作者の幸福な幼年時代、社交界での暮らし、恋愛体験といった思い出が再構成されるスタイルになっている。ここでは、過去の体験というものは消えてしまうのではなく、無意識に沈殿しており、「些細な感覚的経験」をきっかけによみがえるという。そのきっかけが、いわゆるマドレーヌ体験と呼ばれるものである。紅茶に浸したマドレーヌが舌に触れる感覚、その時に広がる茶の‘香り、’が記憶を呼び覚ます、というものだ。

嗅覚は、他の感覚器官に比べ、いまだに解明されていないことが多いと言われているが、現在では、‘香り、’が記憶と結びつくのは、嗅覚が大脳辺縁系に繋がっているというメカニズムは分かってきている。脳は、大脳辺縁系と呼ばれる生命を維持する本能的な部分と、大脳新皮質と呼ばれる人間特有の論理的思考などをつかさどる部分とに分けられており、幼少期からの記憶は消えることなく、大脳辺縁系の海馬に潜在する。そして、嗅覚がとらえた‘香り、’の情報は、大脳新皮質を通らずに直接大脳辺縁系に伝わり、その‘香り、’と結びついた記憶を呼び

* 学術研究員
Researcher

覚ます仕組みになっているという⁴⁾。

こうした理論からも「香り、をきっかけに呼び覚まされる記憶が紡ぐ物語が描かれてきたのかもしれない。そして、過去の記憶というモチーフが、「時間」をテーマにした児童文学のタイム・ファンタジーを形成してきたと言えるだろう。

アリソン・アトリーの『時の旅人』は「古い古い時代とが、分かちようもなくまじりあってかもしだされた、古い屋敷の豊かなかぐわしいにおいです。こういうにおいと音のすべては、織りあわされた光と闇、影と悲劇とともに、これからおはなしする物語の一部になっています」⁵⁾とあるように、匂いがひとつの要因となって過去にさかのぼる。また、ラベンダーの花の香りによって、現在と未来を行き来する、日本のSF、筒井康隆の『時をかける少女』(1967)もその一つと言えるだろう。マーガレット・マーヒーの『目覚めれば魔女』のローラの場合は、過去にさかのぼるのではなく、未来に対して不吉な「予感」がする時にペパーミントのような香りを感ずる。これも「時間」との関わりと言える。

また、日本の古典文学では『源氏物語』の頃から、登場人物の個性を特徴づける描写として「香り、が用いられてきた。人物描写や気品を表現する『源氏物語』の「香り、は薫物による「香」である。これは鑑真和上の来日によって、薫物の調合製法がもたらされたことに由来する⁶⁾。

こうした日本の「香り、の文化一すなわち香道は、香を焚き、それを仏前に供え、敬虔な思いに浸り仏に祈願することに始まったとされる。日本の香りは仏教と共にあり、焚香は仏教の法会には欠かせない物であった。仏教が政治と結びつくことによって、仏教と共にあった「香り、も儀式や権力と関わっていった⁷⁾。

安房直子のファンタジーには、どのように「香り、が描かれているのだろうか。

2. 『ハンカチの上の花畑』—菊酒の「香り、

『ハンカチの上の花畑』(1973)について、三木卓は「映像の圧縮」を指摘する。花畑や、そこで働く者たちを小さくすることで、不思議に思える世界を身近に引き寄せ、目の前で起こすことで、映像が鮮やかにするという効果を生む。それゆえに起りうるすべての世界を鳥瞰することができるという。黙々とたたく小人たちは、可愛らしさと同時に無気味

さも表現し、神秘的な宇宙を創出していることを述べる⁸⁾。

三木の指摘は、花畑を小さな世界にするという視覚的な効果の指摘にとどまっている。しかし、目の前の世界がどんなに小さく圧縮されても、この菊酒が醸し出す芳醇な「香り、は、決して圧縮されることなく作品の中に満ちている。

物語は、一人の郵便屋が、ずっと廃墟と思われていた「きく屋酒店」宛ての手紙を届けるところから始まる。ずっと一人で暮らしていたおばあさんに息子からの手紙を届けた郵便屋は、そのお礼にとっておきの「菊酒」をふるまわれる。おばあさんの歌のような呼び声で、古ぼけたつぼの中から現われた小人たちによって、レースの縁どりがされたハンカチの上で、苗つけされた菊は、あつと言う間に成長する。つぼに運び込まれた菊の花は、つぼの中で、不思議な香りとかくのあるきく酒になるのだった。その酒を飲めば楽しく、心も体も健康になった。

つぼの中で熟成した菊酒は「いいにおいのする、とろりとしたのみものなのでした(21)」と表現され、フランスのぶどう酒よりももっと良い酒で「ほんのりと、花のかおり(21)」がするものだった。その香りにつつまれると、一面の菊の花畑がうかび、のどかな秋の陽がふりそそぐのを感じる。菊酒は郵便屋に活力と、そしてお嫁さんのえみこさんという幸福をもたらす。

郵便屋が「菊酒」にとられるようになったのは、この酒の香りにつつまれた瞬間からであろう。安房が作品の中で、菊酒を作る小人たちのことを、ヨーグルトやパン、ぬかみその精と同じと説明していることから、小人たちの発想は、酵母のしくみと同じイメージなのかもしれない。小人たちの秘かな働きはグリムの昔話に出てくる「こびとと靴屋」を思わせるし、呼び出すことで働く小人の話はウクライナ民話の「びんぼうこびと」にも見られる。また、つぼの中に花を入れ、酒を造るさまは、つぼの中の神秘的な世界の存在を意味し、中国の「壺中天」の物語のイメージを喚起させる。(註)『ハンカチの上の花畑』は西欧と東洋の昔話のモチーフが融合した世界観と言えるだろう。

さらにこの物語には、日本的な雰囲気も多く見られる。日本酒造りの酒倉、菊から作る酒の旨味、戦争による酒蔵の焼失を思わせる描写には、はっきりとした日本的な要素がある。その一方で、小人たち

や、彼らが夢中になるバイオリン、楽の音、若い夫婦が夢見る小さな家は洋風の作りになっており、西洋的な雰囲気もふんだんに存在する。すなわち馥郁とした菊酒の香りは、まさに日本と西洋的雰囲気のブレンドなのである。

きく屋のおばあさんから預かったこのつぼの秘密を、隠しきれなくなった郵便屋は菊酒の秘密をえみこさんに明かしてしまう。やがて、えみこさんのアイデアで、ハンカチをスカーフにすることで、花畑の面積を広くして酒の量を増やし、料亭や酒屋に菊酒を売り金儲けをするようになる。二人で暮らす新しい家の資金を貯める為である。

しかし、二人がやっと手に入れた家の隣に住んでいたのは、あの小人たちを思わせる一家だった。どこからともなく聞こえる酒造りの小人を呼び出す不思議な声から逃げ惑った末に、彼らがたどりついたのは、新装開店した「きく屋酒店」であった。ぼう然とする二人は「外へでて、東通りの空気を胸いっぱいにすいました」というところで物語は終わる。物語は、清浄な空気を吸ったところで終焉をむかえる。そしてそれは、菊酒の酔いが醒めた瞬間でもある。清浄な空気に嗅覚として意識される香りは付いていない。しかし、その透明な空気も〆無の香り、と言えるのではないか。

菊酒は、安房のファンタジー世界が創り出した架空の酒であるから、実際、どのような発酵を遂げたのかを論じることはできない。しかし、活力と陶酔をもたらし日本酒の属性を踏まえながら、東西の要素をブレンドし、かつ、登場人物を陶酔させ、一文字通りうっとりさせるという意味と、えみこさんのように金に目を眩ませてしまうという両方の意味において、読者をも不思議な世界へとといざなう魅惑的な〆香り、が描き出されていると言えるであろう。

3. 「花びらづくし」—枕の〆香り、

「花びらづくし」は、『童話集 風のローラースケート』に収められた連作の一篇である。

石井光恵は、この「花びらづくし」に描かれる桜の美しさと、恐ろしさを指摘する。怖さを感じるほど、降りしきる桜の花びらは、安房直子独自のものではなく、すでに日本文学の中に描かれてきた世阿弥の能楽「西行桜」や坂口安吾の「桜の森の満開の下」に見られ、そこに共通する死のイメージにつながるという⁹⁾。

「花びらづくし」の主人公の「わたし」は、峠の茶店の茂平の妻だ。茂平とともに茶店を開き、山の住人になって五年目にやっと「さくら屋」からの招待状が届く。年に一度、桜の精たちによって開かれるまぼろしの店で、「女なら一度は行ってみたい店」であり、桜の花びらでできた「きれいな物ばかり売って」いるのだという。これほど素敵な店でありながら「あまり夢中になってはいけません。いいかげんで、ひきあげてこないで、こわい目にあいます」というゾクッとさせる怖さが含まれる。

「さくら屋」には、桜の花びらの首飾りに腕輪、ハンカチや帽子、花びら模様の封筒に便箋、花びらゼリーにさくらアイスクリーム、さくらワインにさくら寿司などの商品が並ぶ。そうした商品の中から「わたし」が買ったのは、中身に桜の花びらをぎっしりつめた枕だった。寝心地がよさそうで、朝焼けの雲と同じ色で、あたたかそうな枕を「わたし」は迷わず買うのだった。その時に、「この枕は、お帰りになってからお使いください」と言われたにもかかわらず、腕の中で、「いいにおい」がしたために、つい昼寝をしてしまう。

前述の長居をしてはいけないという注意や、枕の使用方法など、「花びらづくし」には、こうした伏線があり、次第に、恐ろしい体験に近づいていくのだ。

桜の花びらが詰まった枕のにおいは、次のように描かれる。

桜の花は、ほのかなかわいにおいがするので。若い娘さんの笑い声が、こぼれてくるようなにおいです (242)

桜の花のにおいを、「若い娘の笑い声」と表現することから、明るくはじけるイメージであること、小さなものがいくつか合わさった集合体として捉えることができる。

桜林の中で横になると、「わたし」の顔には、おどろくほどたくさんの花びらが吹きつけてきて、払いきれなくなり、またたく間にうすもも色の桜にうずまってしまう。

花びらというものは、おそろしいものです。その美しさにただただ酔っていたのが、まちがいのもとでした。花びらの中に、ふかぶかとうもれて

死んでゆく自分の姿がふっと目にうかんだとき、わたしは、大きな声をあげました (244)

これが、石井の指摘する桜の恐さということであろう。心地よく、癒されるはずの枕に身をまかせた「わたし」は、桜の花びらに死さえ予感している。若い娘の笑い声だったものが、いっきに命を脅かすものに変貌するのである。私が、怖さを感じるのは、息が詰まるような桜の花に埋もれて死を予感することよりも、むしろ、「癒し」を求めて、桜の花びらが詰め込まれた枕に顔をうずめたにもかかわらず、それが「恐怖」に変貌するこの瞬間である。桜林の中で横になるまで、明るくうっとりとする楽しさが広がっていたのに、桜色の世界は色彩を変えぬまま、狂気の世界に変わるのだ。

主人公「わたし」は、夫と店を切り盛りし、四歳になる息子を育てる充実した暮らしをしている主婦である。美しく心地よさそうな「枕」に求めたのは、日々の疲れを癒したいという想いもあったのだろう。一年に一度の招待を待ちわびる姿には、どこか日常から離れて、非日常を楽しみたいというこの年代の女性の生活感が漂っている。そのことは、「わたし」が、これほど怖い目に遭ってもなお、翌年の招待を待ちわびる姿にも表れている。

枕の中の詰め物が、よい香りのする桜の花びらであったということは幻想的でもあるが、ポプリやアロマテラピーを連想する。幻想性や怖さはあっても、桜の花びらが詰まった枕の発想には、そうした癒しの品があったのであろう。ポプリやアロマテラピーは、もともとは医薬品としての使用目的があったものだ。医療目的であるかぎり、使用方法は間違えてはならなし、過剰に使ってはならないだろう。

後に「わたし」は、「そして、やっぱり、ひけどきが、だいじですね。桜林の中に、たったひとりで残るなんてことは、けっしてしてはいけないことのようにです (248)」と心に留める。

4. 「野ばらの帽子」—帽子の「香り」

「香り」が、医薬品的な役割を担っていたことは、古来より洋の東西を問わない。古代から「香り」は楽しみや儀式のために使うだけでなく、薬として使用することは当然のことだった。中世ヨーロッパでペストが猛威をふるった時、香りの高い植物が消毒剤として用いられたし、香水は、修道院で、手の洗

浄に使用された医療用のものであった¹⁰⁾。

日本においても、仏教の法会の儀式から、さらに朝廷で空香という、諸仏に祈願をこめる時の儀式が行われるようになり、それは場を浄め、けがれを去り、清浄を保つ意味を持った。焚香によって、心身浄化を行ったのである。「香り」は、癒しや治療だけでなく、邪気を払う役割も持っていた。また節分は強いにおいで邪気を払う行事であり、ネギ、ラッキョウ、ニンニクを用いて厄除けを行ってきた。ニンニクの強い臭気は西洋でも吸血鬼を避けるものとされてきた¹¹⁾。

こうした、厄払い、魔除けの目的で用いられた「香り」が描かれるのが「野ばらの帽子」であろう。

主人公の「ぼく」は、中原雪子さんと名乗る少女の家庭教師として住みこむために、山の別荘へと向かう。人っ子ひとりない山の停留所に降り立った時、「ぼく」は目の前に人影を見る。大きな麦わら帽子を被った少女のうしろ姿を「ぼく」は、中原雪子さんだと思い込み、後を追う。野ばらの森の中に迷い込んだとき、「あまい、花の匂い」に包まれるのだった。

しかし「ぼく」が中原さんだと思ったのは、鹿の娘だった。しかも、魔法が使用できる高貴な種族であるという。この種族は野犬や人間に追われて死滅してきたが、母娘だけは野ばらのとりでに守られて、なんとか身を守ってきたのだ、という。ここで、野ばらの「香り」は、鹿の母娘にとって、厄除けや魔除けの役割を果たしていることが分かる。

母鹿は、娘の鹿が人間の獵師と結婚しても困らないような教養を身につけてほしいと頼む。「ぼく」は、全力をあげて娘にさまざまなことを教え込む。娘は婚約者の獵師に恋した瞬間のことをこう語る。

—お父さんは、みつかった？—って私がたずねたら、あのひと、悲しそうに首をふって、
—気長にさがすさ—って言ったの。たばこをすってたわ。すてきなにおいだったわ (107)

この時、獵師の若者が吸っていたたばこは、人間の世界の品であり、男性の象徴でもあり、鹿にとっては仇の危険な「香り」だったと言えるだろう。その煙にまかれた瞬間、娘の鹿の心は人間の獵師の虜になってしまう。娘がさまざまなことを学び終え、決して鹿に戻らない魔法をかけてもらって、野ばら

の砦から嫁いだあと、母鹿は「ほく」に魔法をかける。野ばらの帽子を「ほく」にかぶせて、母鹿が呪文を唱えと、「ほく」はあまい野ばらの香りに包まれて、眠りにつくのだった。目が覚めた時、「ほく」は、自分が野ばらの木に変えられてしまったことに気づく。「さあ、これであなたも、鹿を守る野ばらになったのです」と母鹿はおごそかに伝える。

あなたは、むすめの秘密を知っているたったひとりの人間だからです。そう、あの子が鹿だということを、ひとりでも知っている人がいたら、あの子のしあわせは守れません。私は、むすめの秘密を完全にするために、あなたを、野ばらに変えたのです。これが、私の、最後の魔法です (115)

結末を言ってしまうえば、悪い夢から覚めるように、主人公は、現実に引き戻されるが、この作品に出てくる「野ばら」のあまい香りは、高貴な血統の母鹿を守る砦の役割をもち、鹿の娘の人間の姿を保持するためのものでもあった。その一方、家庭教師であった「ほく」を木に変えてしまう恐ろしい香りでもあったのだ。

結果の是非はあるものの、こうした植物による「守り」の効用は、古来より伝わる薬草（あるいは毒薬）を思わせる。

5. 『遠い野ばらの村』—石けんの 〆香り、

児童文学作家の松谷みよ子 (1926-2015) は、『遠い野ばらの村』を次のように語る。「久しぶりに安房さんの『遠い野ばらの村』を読みました。体調が悪く疲れていたところでした。読み進んでいくうちに、おや、と思いました。詰まっていた息がらくになったように思われたのです」¹²⁾。松谷は、文字で書かれた安房の作品を読みながら、そこに「息」、すなわち空気や香りを捉えている。ではこの物語に、満ちる 〆香り、とはどのようなものか。

谷間の小さな村で、雑貨屋をひらいている一人暮らしのおばあさんは、いつも買い物客に、空想の家族の話を読んで聞かせている。息子は遠い町に居ること、一緒に暮らさないかと言ってくるが、自分は子どもに甘えたくないから、ひとりで生活しているのだということ。そして、3人の孫たちのこと—何度も話しているうちに、その「虚言」はいつしか、おばあさんの中では本当の事のように思えてく

る。おばあさんは、つい空想の孫娘のために浴衣の反物を買って、仕立てるのだった。

しかし、ある日、人に語っていたのと同じような12歳のおさげ髪の少女がおばあさんの店にやってくる。少女の名前は、「千枝」と言い、「お父さんのお使いで来た」のだと言う。持っていた風呂敷包みの中身は、「野ばら堂の石けん」だった。かおりがよく、泡立ちがよく、評判がいいので、あちこちで卸してみようということになり、おばあさんの店にもいくつか置かせてほしいと言うのだった。

「おばあさんは、目を細めて、幾度もうなずきながら、ふるしきの中のせっけんをひとつ、手にとってみました。せっけんは、ほのかな花のにおいがしました。ほんものの、ばらのおいででした。おばあさんは、目をつぶって、大きく息をすいこみました。すると、赤や白のばらの花がいっぱい咲きみだれた遠い村が、目にうかんでくるのでした」 (13)

石けんの評判は、上々であつと言う間に売れる。おばあさんは、嬉しくてお客さんに孫娘のことを話しまくる。

翌週もやって来た孫の千枝は、二人の弟たちと一緒に来た。おばあさんの作ったおはぎを、お腹いっぱい食べてつい、眠ってしまい、正体が子ダヌキであることを明かしてしまう。

安房直子の作品には、時に異種交歓が描かれる。美しく幻想的な世界の中に、ひょっこりとコミカルな動物が登場しては、主人公と心を通わせるのだ。

やがて、野ばら堂の石けんで作られた良い香りのする「シャボン玉」を追って行くと、そこは、ほんとうに息子たち一家が住む野ばらの村があった。おばあさんは、お客さんに「とうとう、むすこの村へ行ってきましたよ」と語るのだった。

おばあさんが語るむすこや孫娘の話は、まったくの空想で、なんの根拠もない。村人もその嘘をよく理解していた。

ところが、〆香り、のよい「野ばら堂の石けん」は、そうした虚言を、本物にしている。これまでの、安房直子の「色彩」や「音」は、現実世界から空想の世界へ向かう境界線の役割をしていた。ところが、この香りは、空想世界の 〆嘘、を本物にする力を持っている。目に見ること、手に触れることができない

「ほのかな花」の“香り、でありながら、石けんの香りに包まれると、おばあさんの想像の世界は、決して消えることのない実在の世界になっているのである。

6. 「花のおう町」—キンモクセイの“香り、

タイトルに「におう」とあるように、この作品は香りがテーマの短篇である。

秋のはじめ頃、「泣きたくなるようなあまい花のにおいが、あたりにたちこめた夕がた」に信は、オレンジ色の自転車で女の子が乗っているのを見かける。すれ違った時のにおいは次のように描写される。

胸のあたりがあったかく、くすぐられるみたいなそのにおいを、信はよくおぼえていたのです。そのにおいを胸いっぱいすいこむと、どこかがうずくような気がしてきて、それからからだのどこかにかくしてある楽器が、ふいにすすり泣くように鳴りだすのです。(119)

嗅覚だけでなく、聴覚を二つの感覚を重ねた表現は、安房直子に特徴的に見られるものである。先の「花びらづくし」も桜の花の香りを若い女性の笑い声で表現している。香道において“香り、を識別することを「聞く」という。通常では、“香り、は嗅ぐものであるが、香道では、香木に宿る魂を“香り、を通して「聞く」のである。また、仏教でも香は欠かせない品であるが、これも仏の教えである経文と香を共に「聞く」のだという。経を唱える声(音声)は一過性のもので、時とともに過ぎゆくが、そこに満ちた香の“香り、は、仏の教えとともに誰にも平等に染み渡る、と考えられている。安房直子が“香り、を聴覚的なレトリックで表現するところには、“香り、の元となるものに、物理的に捉えることが難しい魂を感じていたのではないか。

やがて、オレンジ色の自転車は、「しずんでゆくお日さまのほうへまっすぐまっすぐ走って、小さくなって消えていき(120)」、女の子の吹く口笛と「花のにおいだけが、まだそこらにただよっている」のだった。複数の自転車の女の子たちに「こんにちは」と声を掛けられるたび、信の心は「あの花のにおい」でいっぱいになり、自分も彼女たちの自転車を追いかけて行きたい衝動に駆られる。そんな感情になっている信に、自転車の女の子は一緒に天に行こうと

語りかける。天に帰ったなら、信の胸の中で鳴り響く「バイオリンがおしまいになる」のだという。

信が、女の子の群の中で一緒になってペダルをふみつづけていたとき、このあまい花の香りの正体が、「キンモクセイ」であることに気づく。「わかったよ。きみたちが、だれだかやっとわかったよ。なんの花の精なんだか、やっとわかったよ！(127)」

読んでいるだけで、むせかえるようなキンモクセイの甘い香りに包まれる。キンモクセイの香りを知る者なら、だれでもこの香りだけで、オレンジ色の花が思い浮かんでくるだろう。それは、前節で述べた嗅覚と記憶の関係から、過去の体験が思い出されるのかもしれない。キンモクセイは、中国原産の常緑小高木で、10月頃に橙黄色で小形の花をつける¹³⁾。キンモクセイの甘くふくよかな香気は強く、日本では庭木として植栽されてきたが、近年では室内芳香剤としてよく用いられている。

「キンモクセイ キンモクセイ 風に乗って どこへいく」(中略)

「遠い遠い 空の果て 月より星より まだ高く」(128)

急な坂道にさしかかったとき、信の自転車のブレーキはきかなくなり放り出される。気がつくとき、かぞえきれないほどたくさんのオレンジ色の自転車が、空をのぼってゆく。キンモクセイの花のにおいがのこる中、信が自転車を引きずって行くと、キンモクセイの木の下にオレンジ色の小さな花が、まるで、粉をこぼしたように散っていた。

信は「あの少女たちから、やっと自由になれたような気がして」はっとするのだった。信自身、少女たちと最後まで一緒に行ったら、どうなるか分かっていただろう。信は、天へ帰ろうとする少女たちと、一緒に、ギリギリの境界線まで行ったが踏みとどまった。しかし、その境界の線引きは、どこにあるのだろうか。

キンモクセイが、天に帰り、木のまわりにオレンジ色の花の輪ができていたのは、秋の終わりを示している。自転車の少女たちが行った先は、彼岸であり、信がとどまったのは此岸である。信が少女たちと別れ、とぼとぼと家路につくとき、甘い花のにおいは、残り香として漂っている。この場合の彼岸と此岸の境界は曖昧である。胸をふるわすようなせつ

ない「バイオリン」の音は止み、少女たちの姿も見えない。聴覚と視覚は、はっきりと消えてなくなるが、キンモクセイの残り香だけは花が散っても、なお漂っているのである。残り香が余韻となっている。

安房直子は、なぜ「花の香る町」とせずに、「花のおう町」としたのだろうか？

これには、におう（匂ふ）という語が持つ多義的な側面があると思われる。古くから日本語では、「におう」という語は、嗅覚だけでなく、色彩の表現にも使われてきた。「におう」とは、つややかで美しい、ほんのりとしているといった意味もある。

また例えば、刀の刃の地膚との境の、霧のように煙っている部分を「におい」というし、染色においては、上部の濃い色から下部へ淡くぼかす手法も「におい」という。つまり、グラデーションや濃淡は確かにあるのだが、はっきりとした線引きのない部分を「におい」と表現してきた。

広辞苑をみると、臭気や、良い香りが立つ、という嗅覚に関する意味以外に、「かすかな気配を感じる」といった嗅覚をさらに発展させた意味もある。また、「におう」は色彩を表現する言葉であることがわかる。「木・草または赤土などの色に染まる」「赤などのあざやかな色が美しく映える」「美しく染めつける」「生き生きとした美しさが溢れる」といった意味である。そもそも「におう」の「に」は「丹（に）=赤色」を意味する¹⁴⁾。くっきりとした色づきが元の意味であり、そこから転じて香りがほのぼのと立つということになった。

冒頭にも述べたように、安房直子の作品の魅力は、此岸から彼岸への移ろいである。その幽玄の世界観を表わす時、キンモクセイの花の精たちは天一すなわち彼岸へ、信は現世に踏みとどまるのだが、甘い花の〆香り、は、まだ漂っており、彼岸と此岸の境界は曖昧なままなのである。

おわりに

色彩の表現に比べ、〆香り、が描かれている安房直子の作品は多くはない。今回、幾つかの作品に注目したが、においを発するのは、香水や香木といった洒落たものではない。日本酒や枕、麦わら帽子に、石けん、そして今回は取り上げなかったが「風のローラースケート」のベーコンといった日常的なものから立ちのぼる〆香り、である。その〆香り、は、決

して最先端の脳科学的なアプローチで論じられるものではなく、嗅覚として捉える以上の役割があった。彼岸へのいざない、異文化・異世界の調合、異種交歓、厄除け・魔除けの発展型、日本語の「におう」の多義的意味を含んでいた。

安房は自分がかつとも描きたかった世界をこう語る。「私が、ファンタジーの作品を好んで書くのは、空想と現実との境の、あの微妙に移りかわる虹のような色が、たまたま好きだからです。子どものころ、私は、めざめている時と眠っている時の境に、とても興味がありました¹⁵⁾。これが、「移ろい」の部分ということになる。この微妙さを描く時、〆香り、は他の感覚にはない効果を残すことになると言えるだろう。

今回は安房直子作品についてのみの〆香り、の言及にとどまった。今後、安房のファンタジーを〆香り、という観点から読み、その独自性をもっと見ていくためには、児童文学の領域や国内外作品の枠にとらわれずに、他の文学作品に見る嗅覚表現と比較をすることが課題として考えられる。それによって、安房直子の〆香り、の特色がより一層、明らかになるとと思われる。

〔要約〕

本稿では、安房直子（1943-1993）のファンタジーに見る〆香り、の表現に注目することで、作品に嗅覚の感覚がどう働いているのかを考察していきたい。安房直子の多くの作品には、此岸から彼岸への移ろいが描かれる。その移ろいの独特の美しさが、安房作品の魅力の一つと言える。これまで、彼女の作品の特徴を「五感」という視点から捉えようとしてきた。たとえば、視覚・聴覚・味覚がどのように生かされて物語を形づくっているかを見るために、作品中の色彩や音、食べ物の描写に注目した。安房直子の作品における〆香り、には、単に嗅覚で捉えることができる以上の働きがあると言えるのではないかと考える。

付記

※本稿は、2016年10月30日に行われた第55回日本児童文学学会における口頭発表に加筆修正したものである。

註

「壺中の天」とも言われる。《後漢の費長房が、市中に薬を売る老人が売り終わると壺の中に入るのを見て一緒に入れてもらったところ、りっぱな建物があり、美酒・佳肴(かこう)が並んでいたのも、ともに飲んで出てこのきたという、「後漢書」方術伝の故事から》俗世間を離れた別世界。また、酒を飲んで俗世間を忘れる楽しみ。仙境。

使用テキスト

- ・安房直子コレクション 1～7 偕成社
- ・童話集 『白いおうむの森』(ちくま文庫)
- ・童話集 『遠い野ばらの村』(ちくま文庫)
- ・『ハンカチの上の花畑』(講談社文庫)
- ・『夢の果て』(講談社文庫)

参考文献

- ・マルセル・ブルースト：『失われた時を求めて』, 岩波文庫
- ・筒井康隆：『時をかける少女』, 角川文庫
- ・マーガレット・マーヒー：『目ざめれば魔女』, 岩波少年文庫
- ・紫式部：『源氏物語』, 岩波文庫
- ・『グリム童話集』全2巻, 岩波少年文庫
- ・内田莉紗子作, 太田大八絵, 『びんぼうこびとーウクライナ民話』, 福音館書店

引用文献

- 1) 大沼郁子：「色彩」で描く安房直子のファンタジー —「熊の火」—を中心に, 日本女子大学大学院紀要, 21, 17-24 (2014)
- 2) 大沼郁子：安房直子「雪窓」の音、の世界を読む, 日本女子大学大学院要, 22, 7-14 (2015)
- 3) 大沼郁子：「味覚」が深める安房直子の世界, 日月(日本女子大学児童文学究) 8, 32-40 (2011)
- 4) 林伸光監修, 香りの学校編集：アロマテラピーコンプリートブック上巻, BAB ジャパン出版局, 東京, 167 (2005)
- 5) アリソン・アトリー：時の旅人, 岩波少年文庫, 東京, 14 (2000)
- 6) 諸江辰男：香りの歳時記, 東洋経済新報社, 190 (1985)
- 7) 前掲 6), 185
- 8) 三木卓：解説, ハンカチの上の花畑, 講談社文庫, 158-159 (1977)
- 9) 石井光恵：群生と孤影の幻想「花びらづくし」考, 日月(日本女子大学児童文学研究), 8, 21 (2011)
- 10) 前掲 4), 36-37
- 11) 香老舗松栄堂監修・コロナブックス編集部：日本の香り, 平凡社, 22 (2005)
- 12) 松谷みよ子：解説, 遠い野ばらの村, 講談社文庫, 207-211 (1991)
- 13) 亀岡弘・古川靖編著：香りと暮らし, 裳華房, 28 (1994)
- 14) 広辞苑 第六版
- 15) 安房直子：自作についてのおぼえがき, 児童文芸 夏季臨時増号, 日本児童文芸家会刊 (1976)